

Title	江戸時代経世済民論の一考察：林子平の「富国」策を中心として
Sub Title	Modern views on "Kei-sei-sai-min" (経世済民) : Shihei Hayashi's thought on wealth
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.6 (1961. 6) ,p.437(1)- 452(16)
JaLC DOI	10.14991/001.19610601-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610601-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

- J. O. リマースマ『マックス・ウェーバーの  
《プロテスタンティズムの倫理》をめぐって』…渡辺國廣 75
- ソレントロサユーズ編 協同組合経営研究所訳『ソ連邦の協同組合』……………平野 絢子 76
- ウォールド著 森田優三監訳『需要分析』……………西川 俊作 76
- 片山謙二著『世界貿易の発展  
——発展過程の実証的分析——』……………深海 博明 77
- 日本生産性本部生産性研究所編『消費革命とレジャー産業』…佐藤 保 79

江戸時代経世済民論の一考察

——林子平の「富国」策を中心として——

島崎 隆夫

江戸時代に生成・発展した「経済」思想の史的考察を試みる場合、  
わたくしは「経世家」の諸思想の中に散見しうる「富」および「富  
国」に関する諸観念や、「富国」のための諸政策に注目し、それを一  
つの手掛りとして「経済」思想を検討して行く事が問題を解く上に  
多くの糸口を得る結果になると考える。

「富」とは、一般的にみて、ある歴史的社会的生産関係の基底に存在  
し、その社会の歴史的性格を決定している基本的な生産手段および  
生産物の占取の仕方に関連して成立する観念である。<sup>(注一)</sup>封建制の下に  
あっては、何よりもまず第一に「土地所有」が剰余労働（剰余生産  
物）を封建的「地代」として経済外的強制によって収取する基本的  
関係が存在する事から、「土地」Ⅱ「富」という観念が発生した。それ  
と同時に、一定の経済的發展（商品流通の一定の發展）を前提として、  
いわゆる「前期的資本」が「土地所有」と共存し、「前期的資本」は「土

江戸時代経世済民論の一考察

地所有」がまず収取した封建的地代の一部を、その特定の量を貨幣の  
形態で前期的「利潤」として吸収するに至った。かかる事態より「前  
期的資本」の下に蓄蔵された、またそのものとして作用させられた  
貴金屬貨幣としての「財宝」を人々は「富」の一形態として、「財  
宝」Ⅱ「富」として観念する。この事實は、封建制下における「経済」  
思想家の頭脳に、それは極めて複雑であり、また不明瞭な形態では  
あったが、「土地」Ⅱ「富」、「財宝」Ⅱ「富」という観念を展開させた。  
かかる「富」観から「土地」はその上における産業としての「農業」  
を、「財宝」はそれをもちきたらすものとしての「商業」を、「富」を  
獲取する手段として重視する観念や、また「財宝」は「土地」よりその  
分前を奪取するものとして考えられることから、「商業」は「農業」  
の側から軽視され、拒否される観念をも生じた。封建制下における  
「富」および「富国」の観念は、封建経済の推移Ⅱ資本主義社会の  
生成と共に、やがて新しい「富」および「富国」の観念へと変質をうけ  
て行くと同時に、「富国」の政策も自らその内容を変化して行った。

一般に「富国」政策の根底には、それが明白な形で意識され、観念されない場合においても、何等かの形で「富」についての観念が存在しており、「富」についての一定の観念が存在していることによつて、その「富」の増大への、「国を富す」手段として政策の洞察を可能とするものである。それ故、「経済」思想家の「富国」政策を支えているものとしての「富」に関する観念を検討することは、その「経済」思想家の「富国」策を根本において理解する上に極めて重要であると考へられる。とりわけ西欧において、近代科学としての「経済学」が生成・樹立される過程をみると、封建的な「富」観および「富国」観が、その内容を変質したこと、すなわち、封建的「富」観として、土地「富」、財宝「富」の観念が、時代の推移と共に、資本主義社会における商品「富」観へと変質して行った過程を、明白に理解することが出来る。

わが国における経済思想の発展を概括的に見るならば、封建社会下の「経世済民論」が自生的に「経済学」に発展したと考えることは出来ないように思われる。それはわが国封建経済崩壊過程の持つ特質、換言すれば、わが国資本主義経済を展開した歴史的諸条件にふくまれた諸特徴にその因をもつものであり、それとの関連において、わが国における「富」および「富国」観念の変質の仕方にあられた諸特質にかかわる問題でもあると思われる。それにもかかわらず、江戸時代の「経世済民論」のなかに、「富」および「富国」についての思想の発展をあとづけることが出来る。かくて、わが国江戸時代に生成・発展した「経済」思想を検討する一つの視角として、封

建制下に意識された「富」および「富国」観念の性格とその史的発展とを分析することが重要であると考へる。

(注一) 以下の所論を展開するにあたって、小林昇氏「経済思想史」にあらわれた「移行」の問題(「西洋経済史講座」第四巻所収)の論文に多くを負っている。

二

わたくしは極めて不十分であり未整理ではあったが、水戸学派の経世家——幽谷、正志斎、東湖——の経世論を対象として、そこに見られた「富」および「富国」の思想について若干の検討を試みてみた。申すまでもなく水戸学派経世家の思想は水戸藩が徳川幕府政治体制の中で占める特殊な地位や、水戸藩創設以来継承されて来たいわゆる水戸学という思想的土壌、および水戸藩領の社会経済的事情、そこにみられる経済的発展の特殊性に即して形成されて来たものであって、「実学」と称せられた水戸学派の経世済民論を支えていた思想として、その根底に「富」および「富国」の思想があったのであり、それは根本的には儒教的教義にのっとって論ぜられ、時代の推移と共にその内容にやや変化を認めうるものではあったが、水戸藩情および水戸藩領の社会経済的発展に照応して立ち上るしく農本主義的性格が附せられて展開された事を指摘しようと思う。水戸学派経世家の論ずる経世済民論はまず人君の政治的要諦が「安民」

にあることを指摘し、「安民」とは古之人君堯舜が行った仁政の根本であり、「人民を養うこと」、人民に衣食住をゆたかに与えることを第一義に考へた。ここから経世家は自己の眼前にある藩政の腐敗墮落、財政の窮乏、人民の窮乏、国内外の政治的軍事的危機に注目し、その根因を探り、それを解決する諸政策の樹立に向つたのである。まず幽谷においては「好貨の疾」「借金」の二大弊の指摘、あるいは「修惰之弊」「兼併の弊」「力役の弊」「横斂の弊」「煩擾の弊」の五弊の認識となり、この二大弊、五弊の排除が「富」を「富」化するために不可欠の条件であることを認識して、幽谷はこの弊害を排除する具体策を論ずると共に、積極的に「富」を「富」にする方策を論じたのであった。「富国」とは幽谷によれば結局「百姓足。君孰與不足。百姓不足。君孰與足」に帰し、百姓の愛護、勸農に帰結した。国を富ますことは結局百姓「農」の愛護、農の主作物である米の生産の保護によつて可能であった。国産が比較的乏しく、経済的発展におくれを持っていた水戸藩領の社会経済的事情がここに反映して、「国産」の奨励に対してはやや消極的であった。国産奨励のために多額の藩金を支出することは「皆々末業の利を事とし候者」<sup>(注二)</sup>「工商の輩を助ける所以であり、本業「農」を軽視する所以となり、これは「真実国の利」とはならないものであると幽谷は考へた。これらの所論の根底には、幽谷の「富」に対する考方があった。すなわち幽谷の考方よりすれば、「俗人の了簡唯御国へ金錢沢山落込候はゞ国富み可申心得候ト相見え候」という俗論への批判に見られる

ごとく、金銀錢を沢山国内に導き入れ獲得することは直ちに国を富ます所以ではない。むしろ幽谷によれば、その結果は国人の驕侈をおこし、本業を務めず、農を衰退さす結果となり、富の根源を枯渇せしめることとなる。それ故「農をつとむれば貧、商をすれば富」という現実には変革するべきであり、「民の貧富は其もの巧拙の幸不幸さまざま有之候へ共大抵修て惰る者は貧しく儉にして勤る者は富める道理に御座候」という世にすること、農を勤る者が富むべきであること、そこに幽谷は「富国」論の根柢をおき、経世済民論を構成したのであった。此点、正志斎<sup>(注三)</sup>においても所論の性格は同様であった。時代の推移は、幽谷に比すれば正志斎はより広く世界情勢への知識を持つに至り、諸外国において交易が一国の富を致す所以であることを認識しつつも、彼の理論が交易への基礎を欠いている水戸藩領を背景として形成されたことから、それ以上交易に考察を向けず、藩内の窮乏と政治の貧困の因を「二大弊害」に求めて、議論を国内に限り展開する結果となった。正志斎は「時勢の変」と「邪説の害」との「二論」を論じ、眼前の経済事情を説明しつつ、結局において、国を富ます所以のものが「農」の振興にあり、農業の中でとくに主穀作物である「米」作を第一として観念したのであった。米作を阻止、妨害するがごとく他作物の栽培を排除し、米作の振興を願っていた。彼は他面鉛、錫、銅、鉄、硫黄の類を諸国の産より取することを考へ、「山嶽の秘」を発し、鉱山業の開拓に着目していたが、これとても国防の必要による巨艦巨砲主義との関

係で論ぜられたのであって、それらを富国と直結して考えたものではなかった。あくまでも富国の中心は農業にあり、米の生産におかれておいた。正志斉には富について明白なる見解の叙述を見る事が出来ないが、正志斉の富国策の在り方の根底には、依然として幽谷と同じ性格の富の考方が存在していたものと考えることが出来る。東湖の場合においては、幽谷、正志斉に比して、国内外の政治的・経済的危機の激化が彼の理論に一層明白なる形をとってあらわれて来た。東湖は国内改革のため欧米文化の一部を吸収する必要をも意識し乍らも、政治的には攘夷を断行し、経済的には自給的方向を打ち出したものと思われるが、その所論は一藩領たる水戸藩を対象としたものから、次第に日本国を対象とした時務策という性格をもつに至った。これら時務策の根底には東湖の「富」および「富国」への考え方が存在していた。東湖の富についての考え方は次の一節に明白に示されている。「世上に而は金銀を貯へ候を富有と心得候得共、金銀は万物を融通仕候為めに而、諸品さへ御座候へば、金銀は誠に不用の者に御座候へば、金銀は客にて諸品は主に御座候間、右諸品一として土地より生ぜざるもの無之土地より生候もの内、五穀を第一の宝と致し候へば、富国の政は勸農を第一と仕候様、申上候迄無御座候」。東湖によれば、富とは金銀、富有とは金銀を多くたくわえる事であるという「俗論」は批判されるべきであり、金銀は万物の交換を司る交換手段であって、富の実体ではない。金銀は富からみれば「客」であり、「不用の者」、人々にとって第二次

的なものであり、これに対して、「諸品」は富の実体、第一次的意義を持つものであって、その諸品を生み出すものは「土地」である。それ故あらゆる諸品は富は終局的に土地にその生成の基盤をもち、土地に帰属される。しかし土地が生み出す諸品の中で「五穀」を以て第一の「宝」となし、五穀を生産する「農」こそは「富」の生産の根源であるとみなした。東湖によれば、一藩一國を富有とするためにはまず第一に「宝」を増すこと、すなわち「農」をゆたかに本来の生産が遂行出来るようになし、農の発展を阻止するあらゆる弊害を除去し、農の発展を促進する諸政策をとる必要があることとなる。彼は「勸農」を重視し、ここに「富国の政は勸農を以て第一と仕候」という東湖の時務策の根本思想が樹立されたのである。この様に、幽谷、正志斉および東湖らが論ずる経世策の内容に若干の変化が見られつつも、東湖の「富」および「富国」観は、水戸学派経世家の「富」および「富国」観の伝統を継承したものととしてよく特質を明示するものであると理解する事が出来る。水戸学派経世家の経世民論にみられる「富国」観と「富国」政策の根底には、不明瞭であり、未だ十分に熟しているとはいえないが、一定の「富」に関する思想が存在していたのであって、富の性格を理解することによって、水戸学派の経世家の所論をその根底において理解出来るものではないかと思う。この一事例によってみても、江戸時代経世家の経済思想を理解する上に「富」および「富国」の観念を検討することが極めて重要な一視角を形成するものといえよう。

(注一) 拙論「近世経世民論の一考察——水戸学派の『富国』論を中心に——」(『社会経済史学』第二六巻第四・五号所収)

(注二) 幽谷の富国観に関しては「社会経済史学」第二六巻第四・五号二四頁以下参照。

(注三) 正志斉に関しては「同」三〇頁以下参照。

(注四) 東湖の場合については「同」三五頁以下参照。

三

「富」および「富国」に関する思想を検討することが、江戸時代経世家の思想を解明し、その特徴を把握する上に、極めて重要な一視点を形成する。わたくしはいま仙台藩の藩情を背景として展開された林子平(元文三年—寛政五年・一七三六—一七九三)の著書や上書を対象として子平の「富」および「富国」に関する思想を考察し、もって子平の経世民論の特徴を把握し、江戸時代経済思想の史的発展を解明するための一助としたい。

周知のごとく、江戸時代における経済的発展は地域により、また藩により、いちじるしい差異をもつて現われていた。このことと関連して、一地域あるいは一藩を直接の背景として、政策的意味を多分にもって形成されて来た経世家の所論は一地域あるいは一藩の経済的発展と極めて密接に結びついていたと理解出来る。それ故同時代人であっても、直接活動の舞台であり、思想形成の場である一地域あるいは一藩の経済的発展を異にするに従って、いちじるしい相異

を思想内容にあらわして来る。勿論そこには同時代人として共通の思想の在り方を見出すことは出来るが、各々の思想家にみられる思想的特質は、その背景となる経済的発展の差異、それに対する具体的な認識の相異によって生み出された。しかし、文化の交流が盛となり、とくに商品流通、交通網が発達するに従って、経済圏が拡大され、地域差や各地域の封鎖性が打破解消されはじめると共に、一地域乃至一藩単位に形成された思想は、次第に、広く一國をつつむ認識へと拡大されて行った。概していうならば、経済的発展が遅れている藩においては、一藩を中心とする意識が強固に作用した思想が形成されるが、経済的封鎖性が打破され、経済圏が一藩の単位を越えて拡大して行き、経済的発展のより展開した地帯では、藩を中心とする意識は薄弱となり、それに代って「國」の意識がより強固な形をとって思想形成の中にもちこまれてくる。この事は単に水戸学派経世家の思想に限らず、子平の思想を検討する場合にも、軽視されてはならない。

子平の経済思想は主として「上書」や著書の中にかがうことが出来る。明和二年(一七六五)二月、子平二十八歳の時仙台藩に献じた「富国建議」(第一上書)、この上書は仙台藩の藩政改革を意味する九篇五十九条(学政、武備、制度、法令、賞罰、地利、儉約、章服、雜の九篇、これらの序として存寄書端倪、存寄國政の二項がある)より成り、藩主重村に献じた上書。天明元年(一七八一)十一月、子平四十四歳の時再び仙台侯に献じた「第二上書」(存寄、致

富の事一、富政の事二、富政の事三、養蚕の事、蠶植之事、楮の事、煮乾海鼠乾鮑之事、小産物之事、日用品之事、財政の事の諸事を内容とする。天明五年(一七八五)十一月、子平四十八歳の時三度仙合侯に献じた「貨殖存寄書」(第三上書)(この上書には「御国産と銀札と肩を並候て仕手脇と相成候て大貨殖を可仕存寄書」との題が附せられており、国産仕立の事、大産物として四品、漆、桑、楮、硃又は蠶、絹、紙、馬の事、小産物十七品、嶺山の事、細工物の事、国産と楮幣の事、楮幣事略、結びより成つてゐる)。「富国策」。および天明六年(一七八六)脱稿、天明七年第一巻出版、寛政三年(一七九一)仙合にて板行を完了し、それに依つて蟄居禁固を命ぜられた主著「海国兵談」第十六巻略書(略書は文武相兼て国家を經濟し食を足兵を足の義を言て大将の心得トして兵の心帥トス)と子平自身の記事(部分)中の記事、等に散見される。子平の經濟思想は主として「上書」という形式で、時務策を献言した中に示されてゐるために、必ずしも論理的に整然としたものとはいへないが、仙合藩の藩情を背景として開陳された時務策としては注目すべき所論をふくんでゐるといへよう。

(注一) 林子平の生涯を略記しておく。

子平の名は友直、六無斉と号した。元文三年(一七三六)六月二十一日江戸小石川小日向水道町に生る。父は岡村源五兵衛良通、母は旗本青木久三郎喜治の三女、子平はその次男。父は幕府の小

にて板行した。天明五年十一月、「第三上書」を仙合藩に書した。天明六年「海国兵談」脱稿し、翌七年「海国兵談」第一巻の板行なり、寛政三年四月、仙合にて「海国兵談」の板行を完成した。しかし幕府により没収され、寛政四年五月兄の仙合邸に蟄居禁固の身となり、翌寛政五年(一七九三)六月二十一日五十六歳にて歿した。

(注二) 林子平の伝記的研究は今日まで若干これを見る事が出来る。例えば、長田偶得著「林子平」(明治二十九年、裳華房、徳川三百年史下巻所収)、永田衡吉著「林子平」(昭和十八年、大日本雄弁会講談社)、真山青果(林子平の父、林子平の生地)(昭和二十七年、真山青果随筆集所収)等があるが、子平の經濟思想に關して独立した研究は極めて少い。今日まで最もまとまつた研究は、本庄栄治郎氏の「林子平の經濟思想」(「經濟論叢」第五二巻第二号、昭和十六年一月号、後に昭和十七年出版「日本經濟思想史研究」に所収されている)を以て他にない。本庄氏の研究内容は、一、緒言、二、政治と經濟、三、諸侯の窮乏、四、武士階級論、五、殖産興業論、六、銅札論、七、町人論、八、貴族及野穀論、九、結言の九項目の論述よりなつており、子平の經濟思想を三つの上書、海国兵談第十六巻等の所説を中心として叙述したもので、やや併列的に論ぜられてゐる不十分さはあるが、すぐれた研究として子平の經濟思想の全貌をほぼ論じつくされてゐると言つて良

納戸兼書物奉行、元文五年十二月故あつて士籍を脱し、林藤詰と改称し常陸に流浪した。子平の兄弟は叔父林從吾に養われた。寛保三年姉(次女)直が仙合侯宗村の侍女となり、延享四年宗村の側室となり「お清の方」と称した。寛延二年林從吾仙合藩の藩医となつた。宝曆二年林從吾歿し、長男嘉膳が仙合藩の祿をうく。同年父藤詰江戸にもどり「笠翁」と改称した。宝曆六年兄嘉膳は祿百五十石を給され仙合藩士となる。同年五月仙合侯宗村死去、「お清の方」は月智院と改め、宗村の菩提を弔う。子平は兄嘉膳および家族共に仙合に移り、藩の学問所「養賢堂」に入学した。子平は仙合藩領を踏査した。宝曆十二年月智院逝去、子平塩竈の神社祠官となり、やがて東奥第一の国学者藤原式部知明と相知る。明和二年子平仙合藩の改革を意図し、九篇五十九条よりなる建白書「富国建議」(第一上書)を藩主重村侯に献じた。父笠翁はすでに「儀式考」十巻「仙合閑話」「続仙合閑話」等を著し、明和四年六月、六十八歳にて歿した。明和四年子平は江戸に出て、工藤球卿(「赤蝦夷風説考」の著者)と親交あり、多大の影響をうけた。球卿は後に「海国兵談」の序文を書す。又桂川甫周とも交つた。甫周は「三國通覽図説」の序文を書す。安永元年、子平三十五歳の時、一時仙合にかえり蝦夷に赴き、安永四年子平は長崎に遊び、長崎の商館長アレント・ウェル・ヘイトと逢ひ、世界地図を模写した。天明元年十一月、子平は仙合藩に「第二上書」を献じ、經世済民をうたひた。天明五年「三國通覽図説」稿なり、翌六年江戸

なお子平の「富国策」「上書三篇」は「日本經濟大典」第二〇巻に収められており、滝本誠一氏の子平の伝記と簡單なる解説がある。学蔵会編、皇学蔵書第一冊、第二冊として「林子平全集」第一及び第二巻が山本饒氏を校訂者として出版されている。(昭和十八年および十九年、生活社)。第一巻には軍法戰略、兵策問十五條、兵策問、兵策問答、海国兵談、口上之覚、和蘭船図説(天明版)、同(寛政版)を収め、第二巻には富国建議(第一上書)、第二上書、貨殖存寄書(第三上書)、富国策、父兄訓、学則、三國通覽図説、坪碑、道中誌、日記断片、諸誌、日月の犬小、凶豊変換術、三國通覽図説附圖を収む。

四

子平をして「海国兵談」をはじめ「軍法戰略」「兵策問十五條」「兵策問」「兵策問答」等の兵学に関する著作をあらわしめ、又三回にわたり仙合侯に上書を献せしめ經世済民論を述べさせるに至つた直接の動機は、一方には海外事情を認識するに從ひ、外寇の危機が身近に迫りつつあることに対する脅威感、それに対する防禦の必要であるという事実であり、他方自藩たる仙合藩の政治的貧困と財政的窮乏の事実、それに対する救済策が必要であるという認識とであつた。前者に關しては、子平は読書により外国に対する知識を獲得したのみでなく、北は蝦夷の地を尋ね、南は長崎の地に遊んで、ロシアやヨーロッパ諸国の事情に精通することが出来た。しかも日本

は四面海にかこまれてゐる。日本は海国なるが故に、海国相当の武備があることを痛感し、それを「海国兵談」に展開した。海国である日本の武備は外寇を防ぐ術を知ることが急務であり、外寇を防ぐ術は「水戦」にあり、その要は「大銃」にある。此二つを能く調度することが日本の武備の中心であることを主張した。まして諸外国の国情は古のそれと相違し、日本にとってまことに容易ならぬ状態になつてゐたとみた。「日本は朝鮮琉球蝦夷此三国と界を接へ候得は万一此国々より不意に變を生し候節練切たる兵馬を押しかけられ候は、日本は破竹の如く崩れ可申候」と。かくのごとく外寇の危機を認識し、その防禦に心をくだく子平と、本多利明や水戸学派経世家が感じた外国に対する危機観とは、ある意味において相通するものがあつたといふのであり、この点を一つの契機として経世済民論を展開して行つた子平等の所論は徳川初期より中期に至る経世家の所論と、その成立のための前提的条件をやや異にする所以でもあつた。このように外寇の危機の認識、武備の必要、それを可能ならしめるために子平は「国を富せ人を富ス事」を主張した。「如此国を富セ人を富ス事を演説するも武を張べき為の事也、何程国君より命令有ても亦は人々心八丈に武を好ても貧乏なれば武を張ル事は不成也」と。ここより子平は「富国」への政策を樹立することの必要を痛感して行つたのである。

子平は封建制下における諸侯の窮乏化、とくに仙台藩の窮乏化の事実注目し、政治の貧困の状態をうれえた。仙台藩の財政窮乏の

「章服」の九項目である。この九項目に關し簡單なる説明が見られるが、とくに第一の「食貨」については「夫レ人、食無レば死し、貨無レば物を通スル事不能、此故に食貨を經濟の第一とする也」といふ、經濟の第一項目にあげてゐる。又、第八の「地理」については「地理とは國の寒暖、地ノ厚薄、山、沢、河、海、高下、羶濕の差別ヲ細ニ察シテ寒暖厚薄山沢河海高下卑濕の利を不失、尺土も空ク捨置さる様に夫々の手あてを為て地の利を尽ス事也」と、これは國産を制する子平の重要な提言と関連する。かくて「此九ツハ經濟の大趣意也、經濟は武備の根本、武備は經濟の輔佐なりと合点すべし」と。さらに子平は「金銀」が貨殖のために重要な意味を持つてゐる事を指摘する。「經濟の筋目種々有之候得共、日本當時の經濟、金銀より先なるは無御座候、尤聖人の道にも利用厚生を先と仕り又礼記の王制にも經濟の形を悉く申候得ば兎角金穀の富を致候は國家第一の政事にて御座候得共其富みを致すに時勢と人情とを知て術を施し候事肝要の事に奉存候」と述べ、第二及び第三上書における楮幣の制の献言となつてゐる。「開國産」と「楮幣」の制とが相合致して經濟はその内容を充実し、「富国」への道が開かれるのである。

かくて、子平は一國を「富有」ならしめ、藩財政を建て直すための「致富」の具体的な時務策を開陳せざるをえない。ここに「食貨」「地理」を中心として子平が「経世策」を献せざるをえなかつた必然性があり、さらに「金銀」の問題を検討せねばならなかつた理由が

原因は「江戸屋敷と江戸奥方と江戸の音信贈答と、此三つの費移きことにて御座候」といひ、さらに「御手伝計にても大に痛と成候事」と、この四つの浪費をあげてゐる。「惣して當時はあしき風俗多く宜敷風俗は一向無御座候」という有様である。この状態より脱却し、財政窮乏を解決する具体的な時務策が、ここに必要視されて来る所以であり、如何にして貧困をして富国ならしめるか、外夷に対する武備を完備するために如何に一國を富有ならしめるかの「富国」の問題が子平の経世済民論の中心に位置され、意識されて来たのである。

子平が「經濟」を論ずる時、当時の一般の経世家の場合と同様に「經濟」とは「経世済民」の意であり、「夫經濟トハ経邦濟世トて經ハ筋道の事、邦ハ國也國に筋道を附ルを経邦ト云也濟世トハ濟ハわたす事にて此を彼に渡し、彼を此に遣ス事也世ハ世の中也、世の中の人、すまひ易キ様に世話するを濟世ト云也」といふ。政治を行うには次のことに注意する必要がある。「先政を致し候ニは時と俗と地利とを能吞込候而時にもよろしく地利をも遺し不申様に仕り扱其上ニ而法度号令を嚴に仕り一度定申候掟をいづまでも變せぬ様ニ下々迄もよく合点仕らせ奢侈を禁して窮迫仕らざる様ニいたし士を勵し候て武道を盛ニ仕上下よく合點致候て國中之士民天下ニ我國ニ勝れる國は無物なりと思ふ様ニ仕向候を政之達人と申候」と。又「海国兵談」には經濟の大略、國家を經濟するの要として九項目をあげてゐる。「食貨、礼式、学政、武備、制度、法令、官職、地理、

あつた。子平の具体的な「富国」に關する時務策の内容をみることにする。

「人の世に五難」あるいは「大物入成事五ツ」がある。それは「饑饉、軍旅、水難、火難、病難」の五難である。その上に「大名の御身の上に公儀より被仰付候御手伝」の負担が加えられる。この五難、とくに饑饉、水難、火難、病難の四難は交々到来するものである。「此備を致ス事一國一郡を領する人第一の心懸なり」。不慮のための備を完全にすることは常々心がけておらねばならぬことであり、「其心懸として別の物にもあらず、金穀の二ツ也」(海国兵談)「彼是不慮の御備の爲に人しらず金子を捨置候て變に備へ申度奉存候」(第二上書)「……大饑饉の至るべき年数近寄候歟と奉存候是に付候ても金穀の御政事御油断有間敷御時節に奉存候」(第二上書)。この四難の備のためには「金穀」を十分に貯えることが必要である。「此二ツヲ貯ル法」は何であるか、徂徠、春台以来種々説を為して来たが、世が奢侈となり懦弱になつたために「身を苦めて儉約」をなすことが出来ず、不經濟になつたことを改めること、すなわち「身を苦めて儉約を勤されば金穀を貯ル程の手際は致サレざる也」、かくのごとく儉約を行うならば「如何なる不經濟も取直し金穀をも貯て始めて武を張へし」と。金穀の二つに關しては、当時一般に「穀を賤じて金を貴フ」風習のあることに對して、貴穀賤金の思想を展開している。此の場合穀を貴ぶことは、穀物のもつ饑饉、兵乱時の使用価値に重点をおいての、當時の一般の考え方を述べたものであるが、

金銀を第二番の物と考えており、それを積極的に否定していない点に注意すべきである。それ故、非常の場合にあっては穀を重視するが、他面「金子」を拵置くことによつて備を為すことをもあわせて主張していた。

さて「国を富すの御政事」は密接なる関係をもつ二つの政策により実施が可能となる。すなわち第一は国産の奨励であり、第二は金銀に関する処置である。この二つの政策が相合して「富国」の実をあげうるものである。

「よく地利を取立候は大ニ国之富と成候事ニ而御座候」「土産之多きは国之益となり、土産之無は国之損にて御座候」と、「地利を取立候こと」「地利を尽す」ことが「国之富」となるということの認識である。「地利を尽す」とは「土地より生じて人之利用と成候物共を遺さず取用ゆる事ニ而御座候」であり、当時の儒者の理論と同様であり、それを十分にするためには「術」を必要とする。子平が以て範とする国産の多き藩は「薩州・備前・備中・四国・肥前・上総下総・紀州・遠州・南部・会津・米沢」であつて、それらは皆土地相応の物産を仕立てて、富国であるが、これに反して仙台藩は仙台穀や馬を除いて全く国産を欠いている国である。自藩に国産を奨励し、土産を取立てることの必要なる所以を主張した。この場合まず第一に注意すべきは「土地には南北寒暖の差別御座候故、一様に不被申候得共其寒暖相応の物を考候て国産を仕立候がよく御座候」という事である。それ故「御国は東北の辺地にて御座候得ば妄りニ

させる」のであつて、ここでも良夫の力を用うることをさけている。「とかく工人の多きは国之益と相成申候」とはいうが、しかし「商人ニ而工人を御仕立候ては何の御益にも成不申候」といひ、商人に支配される工人によつて行われる生産は商人の益とはなるが、国のために益とならぬ事をいひ、当時の細工物の生産の在り方と関連して興味ある着眼である。此様な制限を附しつつも、土産を取立てることによつて、生産物を豊かにする事が出来る。「右の通ニ而地利之事大概残り申間敷如是被成置候は、目前之利は見へ申間敷候得共三四之後より次第ニ驗シ相見得可申候且永々御国之御利益と相成候事ニ而有之候は何卒此地利を御取立可被成置候」と。

さて「貨殖」は国内において土産を取立てること、国産を盛にすることを根本とするものではあるが、それだけでは未だ十分とはいえない。「其品は土産を取て他国へ廻し候は他国の金銀手前へ入申候、又諸物を他国より買入候時は手前之金銀皆他国にぬけ出可申候」と、あるいは「何卒御国にても日本中へ行渡り候程の大産物を四五品取立申候て他邦の金銀を御国へ取入御国中を潤沢に仕り人々衣食を足し申度奉存候」と、あるいは「貨殖仕り取集めて見候処、取も直さず御国中の金銀にて御座候得ば、上御一人の御益には相成候得共さして御国中の益と申候筋に相成不申候……上は富候ても下は愈々衰微可仕と奉存候、然る故に右貨殖の事は江戸及び他所に於て事を勤め候て他邦の金銀を御国へ取入れ候工夫を専一に奉存候」と。これは国産品を他国へ出して、それと引替に金銀を獲得すること、

四国九州暖地の物を移し候て仕立候とも用立不申」であり、無条件に、無思慮に他国のものを取立てることは不可である。寒地である仙台の国産として、次の諸品を取立てることを勧めた。これは仙台藩の産業の発展との関連において考究されたものであるが、この小論では個々の国産品について詳述する余裕はないが、その品目をあげれば次のごときものである。寒地に負けぬ品として漆、桑、楮の三木と秣を植え、蠟、生糸、紙、馬を生産する。海産物として煮乾海鼠乾飽、すなわち「俵物」の生産、鯉節、乾鯛、塩鱈、塩赤鯛や煙、紅花、川芎、沢瀉、黄蓮、蓮肉、三陵、真綿、銅、鉛、鉄、鋼、塩、さらに細工物として押掛、墨、扇子、団扇、桃灯、紙子類、張抜細工、張文庫類、傘、竹細工、毛簾、毛細工、烟管、筆、膳碗、其他漆細工、曲物類、陶器等の国産品をあげて、その生産の増大を奨励している。しかしこの土産を取立てるに際して注意すべき事項が述べられている。まず「産物仕立候ニは古き事ながら、良田を費不申、良夫の力を用不申候而只捨地と婦女兒等の力にて仕揚候事産物を司り候者の眼の付所にて御座候」という事である。桑、漆、楮の三種は良田ではなく捨地を利用して、良夫の力によらず婦女子の労力によつて行わなければならない。良田、良夫の力は米穀の生産に向けらるべきである。これが逆になると「宝貨は通用して賑ふ様なれとも五穀不足に成て大に不好事也」という事が起つて来る。土産を取立てる事が、米穀生産に対しても従つていく事である。さらに細工物は「士凡諸陪臣町人宿守之隠居婦女等に教て製作いた

それによつて国が富むと考え、あるいは金銀によりて国内にて生産せぬ品物(薬物等)を購入して国元に送つて便宜をうる事が大切であるという。又消極的には、日用品のごとき「多く他所仕込に仕候故、御国の金銀は年々他所へ吸取られ申候」のごとく金銀を他領に出し、又木綿のごとく国内で産出せぬ品を買付けるために多額の金銀が流出することをやめるために、紙布と紙子を生産し、金銀の流出をとどめる事が出来れば、それだけ国中は富むということが出来るかと考へて、子平は「富国」の実をあげんとしたのである。

右に見たごとく土産を取立て、国産を振興することが「富国」の根本であり、それを他国に送りて金銀を獲得することによりそれを完成することと考へているが、国産を振興するための不可欠の条件として「金銀」「貨幣」の作用と対策についての考察と、政策樹立を子平は重要な時務策の一つとして取上げた。「御国産の類に一つの工夫御座候、先づ近來段々御究迫に被為至、御上下ともに、つかれ苦み候得共是を御救ひ可被成置御手だて無御座候、只楮幣を可被相行御用意專一と及承候」、「此度の大工夫は御国産ヲ夥敷仕立候て其上ニ楮幣四十万両制作御国産と楮幣と仕手脇と相成候而打返し御国益ヲ相附可申妙慮ニ御座候」、「御国さんを夥敷仕立候而も楮幣無之候へは御益薄く、又楮幣四十万両出来候而も御国さん無之候へは是又御益薄く御座候」と、第二及び第三上書を中心として国産と楮幣との関係を叙述しておるが、楮幣(紙によりつくられたものではなく、金属とくに銅にて生産し、その形、発行等について詳細な

る説明がある)を四十万両発行し(楮幣が金銀に代りて国内に流通するための諸条件を整備しつつ発行し、流通に不便無きをきしてゐる)、その楮幣によって数々の国産品、細工物等を残らず藩が買上げる。藩専売の方法である。その国産品を江戸に開かれてゐる「仙台屋」に送りこみ、残らずその店において売渡し、国産物を金銀にかえ、金銀を獲得する。結局においてかかる政策の実施は「札を以て国産を買へ他国へ出して正金にする所上の御益に相成り候事にて御座候」との結果を生むのである。

かくて、子平は「御国産共を被相仕立且鉄判、大銭の内出来候て彼是御國中潤沢に相成候はゞ一の奥の手には前文に申上候学校に於て十分に文武を講じ御国風を一変仕り候て日本無雙の文武国に可仕儀此一策に御座候様に奉存候」と。国は富み、それにより学校を興し、文武両全の人材を教育し、武備を完備することにより、日本無雙の文武国となる事が出来ると。

(注一) 欧羅巴に關する認識は次のときものである。「又近頃。

欧羅巴の莫斯科未亞其勢ヒ無雙にして遠ク韃靼の北地を侵掠し此ころは室韋の地方を略して。東の限り加模西葛杜加カモシカドカ蝦夷ノ東北ニ在カモシカドカ迄押領したり然ルに加模西葛杜加より東には此上。取べき国土なし此故に又西に顧ミテ蝦夷國の東なる。千嶋を手に入ルべき機しありト聞及べり既に明和辛卯の年莫斯科未亞より加模西葛杜加江遣シ置ル豪傑。バロンマオリツツ。アラアダルハン。ベンゴロ

ウといふ者。加模西葛杜加より船を發して日本江押渡り港々江下繩ナして其深サを計りながら、日本を過半。乗廻したる事あり就中土佐の國に於ては日本國に在合。阿蘭陀人江と認し書を遺置たる事もある也是等の事其心根可憎可恐。是海國なるがゆへに來ル間敷船も乗ル人の機転次第にて心易ク來ラるゝなり察スベシ。〔海國兵談〕自序、全集第一卷一一五―一一六頁)以下子平の上書および著書の引用はすべて「林子平全集」によつた。頁数は通巻頁である。

(注二) 「海國兵談」を著作するに至つた直接の動機を次のごとく述べてゐる。「小子は直情徑行の独夫なるゆへ敢て忌諱を不顧。因て。ベンゴロウ。が事を始トして都て外寇の來り易キわけを有のまゝに書して却て海國肝要の武備は如此也ト云事を肉食の人々に知しめんと欲ル故。見聞スル所を纂集シテ此書を作爲ス。」

(注三) 「海國兵談」(全集一一三頁)

(注四) 「富國建議」(全集四一八頁)

(注五) 本多利明の外國認識については拙論「本多利明の農政論」正・続「三田学会雜誌」五一卷五号および一〇号)

(注六) 「海國兵談」(全集三七五頁)

(注七) 子平は「教育」をとくに重視し根本的なるものと考え。富を致す場合まず和漢古今の事跡を多く学び取る事をしないならば了簡も出ず、規繩も立たないのである。武備を完備する場合にも偏武になることを極度にいましめてゐる。「偏武なれば野也、

無智也、元より兵器凶器也、然レとも死生存亡の係ル所にして國の大事是に過ルものはなきゆへ、野にして無智なる偏武の輩に任せ難き事也」、「偏武に不陥して、文武両全なるべき事を欲し願フべし」、「文武相並て國家を経済すべし」と。あるいは「文武両道ハ大極ノ如ク一ニシテ休臥之二徳也、文徳ハ治國齊家身ヲ正直ニ治ルニ在武徳ハ其文徳ヲ破リソコナハヌ様に守治シテ惡ヲ去ルノ法也、文ハ清、武ハ強」と。武と文とをかねそなえさせる方法は「教育」を盛にすることである。又「國君と家者と不学無術なれば國家貧乏す」ともいふ。学問の必要なる所以である。ここより、「御國ニ學校を建立候て人々を教立て先人を取立候て其上に政談に可及事に奉存候」と學校の設立を主張し「學校を盛にする事御國永久の御宝と可申」として、具体的に文武両全の教育を行う學校建設案を述べてゐる。しかしこの學校建立のためには「金子」を必要とし、そのために貨殖の道を講ずる必要があることをいう。すなわち「此段拙者第一の存寄にて御座候得共、金銀不足にては、此術も始め不被申候故、無抛、貨殖の儀を第一に仕り、此条を第二に申上候事御座候、實は此學校を建立可仕為めの貨殖の術に御座候」

なお、子平は學問を旧來既存の學と異なるものと理解し、「兎角學問は朱子流も陽明流も仁斉流も入不申ものにて御座候只博く書を誦候て和漢古今之治亂興廢損益得失を知り候得は自然と才智は生し候ものニ而御座候」と、あるいは「文を學て國ヲ治メ武ヲ張

テ國を強クする事本にして、茶の湯、田獵等の雜事は末也」とも述べてゐる。

(注八) 「富國建議」(全集四五〇頁)

(注九) 同

(注一〇) 「富國建議」(全集四一三頁)

「昇平久キ時は必華靡を生ス華靡盛ナル時は諸侯士大夫貧究ス、貧究する時は武備も名のみ存して實用なきに至ル竊ニ憶フ当世若クは華靡盛なりトいふべき歟」(全集三八三頁)

(注一一) 「海國兵談」(全集三七九頁)

(注一二) 「富國建議」(全集四一一―四一二頁)

(注一三) 「海國兵談」(全集三八四頁)

(注一四) 同

(注一五) 同

(注一六) 「海國兵談」(全集三八五頁)

(注一七) 「第二上書」(全集四九九―五〇〇頁)

(注一八) 子平が富國策を総括して述べたものに「富國策」(全集第二卷所収)がある。これは「貧富の分る、所以」を論じたものであつて、「行文難波にして通解に苦む所多し」(「日本經濟大典」第二〇卷滝本誠一氏の解題)といわれるものである。「文武」を重視し、教化が行われることを根本とし、以下天地の産物の特性を知り開物し産なきの地をなくし、農をすゝめ、扶持人百工の富を保ち、市商の道を弁じ、國および國君の無用の費を節し、個人生

活では飲食を略し、衣住を簡素にすること、これら一連の行為を貫くに「信義」をもってすべしと述べている。このことは、まず個人、国君および国家における節儉を第一とし、百工および農による国産の開発、増産を勧め、それを他領に販売して一國を豊かにする。これら全体の経済を司る者に人材を得る必要が、そのために教育を盛にすることを論じたものである。

(注一九) 「海国兵談」(全集三五九頁)

(注二〇) 同

(注二一) 同

(注二二) 「第二上書」(全集五〇三頁)

(注二三) 「第二上書」(全集五〇四頁)

(注二四) 「海国兵談」(全集三五九頁)

(注二五) 「海国兵談」(全集三六〇頁)

(注二六) 同

(注二七) 同

(注二八) 「当世上下ともに穀を賤じて金を貴フ也其心根、歳、饑饉して米穀、何程貴とも金銀さへ多ければ買求ル事仕易シ此故に金銀を第一トして穀を心トせざる也、是甚危キ心懸也、其故は……

金銀は命を救フ第二番の物なる事を知て米穀を第一、金銀を第二ト心得て平日食糧に成へき物を貯ル事ヲ勤ムヘシ、是國郡を領スル人、第一の覚悟ニして下庶人に至ル迄も此心懸を忘却スル事なかれ」 「海国兵談」(全集三六〇頁)

(注二九) 「第二上書」(全集五〇四頁)

(注三〇) 「富国建議」(全集四四四頁)

(注三一) 同

(注三二) 同

(注三三) 同

(注三四) 「富国建議」(全集四四五頁)

(注三五) 「第二上書」(全集五一二頁)

(注三六) 「第二上書」(全集五一一三頁)

(注三七) 「貨殖存寄書」(全集五三七頁)

(注三八) 「海国兵談」(全集三七五頁)

(注三九) 「貨殖存寄書」(全集五四八頁)

(注四〇) 「富国建議」(全集四四五頁)

(注四一) 同

(注四二) 「富国建議」(全集四四九頁)

(注四三) 「富国建議」(全集四四四頁)

(注四四) 「第二上書」(全集五二七頁)

(注四五) 「第二上書」(全集五〇五頁)

(注四六) 「第二上書」(全集五二六頁)

(注四七) 「第二上書」(全集五二七頁)

(注四八) 「貨殖存寄書」(全集五四八頁)

(注四九) 「貨殖存寄書」(全集五四九頁)

(注五〇) 「貨殖存寄書」(全集五五一頁)

(注五一) 「第二上書」(全集五二九頁)

五

以上子平の「海国兵談」および三回にわたる「上書」を中心として、子平の時務策と富国策の展開と構造とをあとづけてみた。子平が富国策を論ずるにあたり、常に数にあかなく、数字をもって具体的実例をあげて富国策を根拠づけたという方法は、子平の所論の特徴の一つを形成していたと考えられるが、このことを詳細に検討することはすべて省略して、ただ子平の富国の思想を検討するにとどめた。すでにみたごとく、子平において「富」や「富国」の観念は必ずしも明白な形で、論理的に述べられてはいないが、彼の所論の中から、われわれはほぼその内容をうかがうことが出来る。まず「富」であるが、子平にとって、富とは「土地」を土台としそこに生成して来る「諸物」として、その「ゆたかさ」としてまずつかまれているごとくである。「諸物」はまず使用価値として、その中年貢の主体であり、主食である「主穀」がゆたかであることの中に「富」を意識した。と同時に、子平は「金銀」をも「富」と意識する思想を懐く方向を持っていたと思われる。「物」と「金銀」とはその性質を異にしており「貴穀賤金」思想より、前者を重視し、後者を軽視する考え方を述べているが、「金銀」の役割を全く否定しているのではない。すなわち、一方では「富」をとくに戦時、災難時に人間生命にかかわるものとして素材的形態においてみる既存の考え方を依

然として強く残存していたが、他面「金銀」に対してもその持つ意義をそれが諸物と交換しえ、買いとるという性質の故に否定していない。このように「富」の考え方の中には使用価値、素材的観点からする「諸物」を「富」とみようとすると、交換手段、流通手段としての「金銀」——貨幣の作用は流通手段として理解され、それ故に金銀の代替物として楮幣が考えられていた——を「富」とみようとすると考方とが、入り交って見出しうると理解出来る。それ故、「富国」についても前者の考方からは当然「大地」より多くの物材を生産することが「富国」の源であり、とくに農を勤めることが「富国」の大本であり、「地利を尽す」こと、さらに「小産物」の「加工」の中に「富国」への徑を見出さんとしたのである。しかし、この場合、「人間の働き」は「地利を尽す」に必要な「術」として理解され、それは「富」や「富国」との関連において「土地」と同様に意義づけられていたのではなかった。「人間の働き」(労働)の向けられる方向は限定されて考えられ、「良夫の力」は水田耕作のみ向けられ、他産物を生産する事に向けられることを拒否する。このことはそれだけ主穀生産の弱体化でありその労力の不足としてあらわれると考えていたからである。他産物の生産や加工作業への人間の働きは、「良夫の力」以外の労力に遊休の労力によって行われねばならぬことを主張した。遊休の労力を活動の状態に引き出すという意味では一種の積極性を持っていたのであるが、主穀生産以外の産業に対し「良夫の力」を向けしめず、遊休の労力で事た

りうると考えている点で、他産業の役割の評価の中に未熟のものが見出される。かくて、子平は「地利を尽し」、土産を取立て、国産品をゆたかにすることが「富国」の根源であると理解すると同時に、これのみでは未だ「富国」は完成せず、国産品を自国内にとどめ消費することなく、他領へ売却し、「金銀」をうることによって「富国」が完成するという理解を持つに至った。積極的には「金銀」の獲得が「富国」につながり、消極的には国内に生産せぬ物資を領外より買入れることにより「金銀」を他領に流出することは国内の「富」を減少させることを意味し、そのことが貧国化の一因であるとの理解が同時に子平の思想の中に見出されると思う。かくのごとく二方向において「富国」策を論じたとみられることは、子平の「富」について二方向の考え方が相互に関連し、相混じていたこと

に根拠があったのではなかったかと思われる。すなわち、子平の「富」および「富国」に関する思想の中には、依然として「諸物」および「土地」「農業」「主穀作」を中心とする考え方が強く支配していたのであり、他面一見それを否定するがとき口吻をもらしながら、最も力点をおいて強調しているのは、諸物を国内において生産し、国産を奨励するための貨幣的操作や、国産を他領へ輸出し「金銀」を獲得するための政策であったのである。このことは子平自身否定的言葉で述べているにもかかわらず、「富」を「金銀」との関連において把握しようとする「富」観や、「金銀」を獲得せんとする「富国」観と、ある意味において密接に結びついていたものと考えることが出来はしまいか。(昭三六・四・二八)

## 第一次大戦後の農業恐慌の性格(下)

—— 一般的危機第一段階における農業恐慌の分析(一) ——

### 常 盤 政 治

まえがき——問題意識と論点開示

一 戦後農業恐慌の構造的基盤

—— 第一次大戦による世界経済構造の変化 ——

I 債権・債務国の地位の逆転

—— ヨーロッパ経済の疲弊と

II ヨーロッパ農業の衰退と

大西洋彼岸諸国における農業生産の増大

二 戦後ブームと戦後恐慌の性格

I 戦後ブームのメカニズムとその特徴

II 戦後恐慌の深度と統一的世界循環の回復(以上前号)

三 戦後農業恐慌と農業生産力構造の転換(以下本号)

I 農産物価格低落の特質

II 戦後農業恐慌発生のメカニズム

III 戦後農業恐慌の歴史的意義

—— 一九二〇年代における

農業生産力の発展と農民層分解の性格 ——

第一次大戦後の農業恐慌の性格(下)

三 戦後農業恐慌と農業生産力構造の転換

I 農産物価格低落の特質

第一次大戦中におけるヨーロッパ農業の衰退と大西洋彼岸諸国、とくにアメリカ合衆国における農業生産の増大、という資本主義世界の農業生産力配置の不均衡的展開については既に述べた。

戦争によって農業生産を著しく縮小したヨーロッパは、農産物の輸入をかつてなかったほど必要としたが、大衆の購買力減退のために、増大した大西洋彼岸諸国の農産物を戦後も消化しつづけるということはできなかった。

かくて、「大西洋彼岸諸国の農業生産力の発展」は「極度の貧困化したヨーロッパ大衆の消費制限と衝突し、ここにアメリカ農産物の過剰化、価格下落として爆発」したといわれている。たしかに、第一次大戦を契機とするアメリカ合衆国をはじめ大西洋彼岸諸国の農